『歎異抄』 安居に学ぶ

後藤 昭子

今年も安居に参加するご縁をいただき、4年目になります。私は、聞法の中にこの身をおいて生活していくことの大切さをここで学びました。2週間の間、寺を留守にして家族には負担をかけることにはなりますが、理解をしてもらっています。

仏教というとインドのお釈迦さま（仏陀）でございます。「すべてが御縁で始まりご縁で終わる」このことを悟られて仏陀になられました。ニュートンという人が、林檎が木から落ちるのを見て引力を発見しました。物が下へ落ちることは、誰でも知っております。お釈迦さまも、日常の生活の中にある「ご縁」というものが、「すべてがご縁ではじまりご縁で終わる」という悟りの境地になったのです。

ところで、「安居」という言葉はどこからきたのでしょうか。その語源ですが、インドはとても暑い国で、カースト制度により貧富の差がある国です。そして、日本の梅雨みたいな雨季には外に出ることも出来ないくらいの大雨が降り、道が川になってしまい歩けなくなります。こんな時には、屋根の下で教えを聞くのです。これが「安居」の始まりではないかと言われます。

その「安居」で沢山学んだ中で考えることは、人間の考え方は相対的に分別、自力、差別の中で右往左往して、何を目的に生き、何を願って生きるのかを求めているうちに分からなくなって、だんだんと歳をとっていってしまうのです。だからこそ、自力をすて「念仏して仏になる」のです。

親鸞聖人は、「念仏には無義をもって義とす。不可称不可説不可思議のゆえに」と仰せられています。このことを簡単にお話すれば、「念仏」は「南無阿弥陀仏」ですが、一万遍も称えなくてもいいのですよ。「信」をもって1回でもいいのです。「無義をもって義とす」は、人間のはからいを超えて、大いなる感動で、そしていかなる称賛や説明も及ばないのが「不可称、不可説、不可思議」です。人間のはからいや利欲、打算を超えたところに仏教はあるのです。このお話はもうおわかりだと思います。『歎異抄』第十条からです。

浅学な私が私なりに理解したことをお話しさせていただきました。

以上